

慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resources

Title	異本『発心集』巻一考
Sub Title	
Author	山部, 和喜(Yamabe, Kazuki)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1989
Jtitle	三田國文 No.11 (1989. 6) ,p.1- 11
JaLC DOI	10.14991/002.19890600-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19890600-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

異本『発心集』卷一考

山部和喜

本稿は、『発心集』を異本の側から考えてみようとするものである。従来顧みられることの少なかつた異本『発心集』に注目し、その流布本との本文の異同の意味の一端を明らかにすることを意図する。

異本の本文について現在までどのように考えられてきたか、大略振り返りつつ、稿者の問題意識を述べてみたい。以下、異本系の本文を神宮文庫蔵本（以下神本）に代表させ、流布本系の慶安四年刊本（以下慶本）と対比しつつ考察を進めたい。

神本は、永積安明氏によって紹介された⁽¹⁾。氏の見解が現在まで大筋で通説となっており、やや詳しく見ておきたい。氏は幾つかの語を例示して、神本の本文を「流布本より一層原形を留めていると認むべき章句に乏しくないし、又流布本の明らかな誤説を正しうる場合も甚だ多⁽²⁾」いが、同時に後人の手による「説教的口吻、實際的解⁽³⁾」が加わっているとされた。さらにその説話の順序に關しては、次に挙げる諸点から慶本の方が「穩当⁽²⁾」であるとされた。

(1) 神本第13話⁽³⁾（慶本第二〇話）に「彼、鳥羽僧正ノ年来ノ行徳」とあること。「鳥羽僧正」は、神本第59話（慶本第一九話）に「近来鳥羽僧正トテヤゴト无キ人御座シケリ。」と扱われている。

(2) 神本第18話（慶本第一六話）に「サテ彼内記ノ聖ノ弟子ニ成テ」とあること。「内記ノ聖」は、神本第19話（慶本第一五話）に登場する。

(3) 「此參河聖ト云ハ大江貞基ト云博士是也」で始まる神本第18話（慶本第一六話）は、「三河ノ聖」が秀句を作ったという記事をその末尾に持つ第19話（慶本卷第一五話）の直後にあるのが「適わしい」。

(1)・(2)は、「彼」という語がそれ以前に登場しているはずの人物に付けられているとの前提による。(3)では、それに加えて説話の冒頭の部分と前の説話との叙述の流れのなだらかさをその根拠にあげられる。

さらに永積氏は諸伝本との関係を推定し、神本は慶本との共通祖本である六卷本（現存せず）から脱落（増補）・抜書・錯簡があったものと位置づけた。しかし、その「成立の原因」は、抜粋と文章の

改変による抜書とするには、「その排列に全く意義を認め難い」し、錯簡説も不十分だとして、「殆ど決定不可能に近い」とその判断を留保された。

その後神本先行説を採り、現在の説話配列は説草型の分冊冊子の段階で錯簡が起ったものであるが、その本文は慶本より古態を残す善本であるとされる貴志正造氏と、神本の配列を乱れているとされ、同時に神本の独自評(多くの話の末尾にみられる神本のみはいわゆる説話評論の内容をもつ独自異文)等と共通の評との異質性に注目し、その後代性を認めようとする慶本(6)に代表されるごとく、両本のどちらがより原態に近いかという論議とともに神本の本文とその説話配列が考察された。

現在までの神本の評価については、高尾稔氏『発心集』の基礎的諸問題をめぐって「諸本本文の吟味から」(京都女子学園仏教文化研究所研究紀要第十七号 85・3)に詳しく示されているのでこれ以上繰り返さないが、現今の慶本神本の両本をもとにして、より時代を遡るという方向で考察されることが多かった。それは、『発心集』の原態を追及する、成立の過程を明らかにしていく、もしくはそれに出来るだけ近いものに遡るという意図からは至極当然のことであったにせよ、ここでは神本そのものが考察の中心的な対象となることは少なかった。ここでは先行諸氏の論考に導かれても、両本の新旧の問題、原態への遡及の問題をひとまずおいて、これまで見過ごされてきた神本の側からの見直しを進めてみたい。両本の細部の語句については、どちらの語、章句が正しくあるいは正しくないかという当否のレベルを中心としてこれまでも幾つかの論考がなされており、それにより明らかにされたことも多い。しかし

両本の異同の全体を見るとき、それだけでは包み切れない様相を呈していると思われる。神本の語句が当初からのものであるのか、後補のものであるのかを覚えて区別することなく、現今の形態においてそれらがいかなる意味を保有しつつ、一本を成しているのかを考えてみたい。

本稿ではその試みとして、両本が同じ説話の並び方を示す第11話を中心に、神本独自の語句と説話との関係、さらにそれによって生まれた説話相互の関係性について考察し、そこから神本の全体像を明らかにするための端緒を探ることとする。

二

まず神本独自の語句が、一つの説話の中で果たしている役割についてを考えてみたい。第9話「止水谷ノ上人魚食事」には、神本では仏種房の記事が二話、慶本では三話収められている。仏種房の留守中に侵入した盗人の話、さらに檀越の女に頼んで一度は魚を食したが再び魚を進呈されると今度はそれを断る話、そして慶本のみにある彼の臨終の話である。ここに登場する仏種房は、『高野山往生伝』、『高野山春秋編年輯録』等に名のみえる心覚仏種房かともいわれるが、ここにある内容を含んだ伝承等は諸書には見られない。

第9話の第二の部分で、仏種房は檀越に魚を食させてくれるように頼み、一度は「ヨゲニ」食すが、二度目に魚を持参した檀越に対しては「一日ニタベ飽キテ今ハホシクモ侍ラネバ、是ヲバ返ン奉ル」といって魚を返す。この話の末尾に次のような異同がある。なお引用は神本の本文を用い、問題となる異同の部分破線で示し、へく内にその部分の慶本の本文を示す(以下特に断らないかぎり

同様)。

是モ此世ニ執心ヲ留メジト思ヘルハカガリ事ヘ該当部分ナシヤ。

「是」という語は、一度は魚を食べ、二度目は食べなかつたという行為を指す。その行為は此の世に執心を留めまいとしたものであるとして、さらに神本は「ハカリ事」という語によつて意図的なものであつたことを明示する。

第一の部分では、逃げることでできない盗人は、恐ろしさの余りに盗んだものを仏種房に返して逃げ去ろうとするが、それに対し彼には必要の無いものであるから返さなくともよいという。

聖ノ云ク、何ニシニカニハ罪ミ深クカ、ル分ケテ物ヲ取ラバ取ラントハスル。但シホシト思ヒテコソ取リツラメ。実ニ返ス得ベカラズ。其レ先クトテモ事欠マジト云。盗人猶恐レテ物ヲ捨テ行キケレバ、袖ヲヒカヘテナンヘ盗人ニトラセテヤリニケリ。大方心に哀ミ深クテ毎事ニ无相ニヘ該当部分ナシゾ有ケル。

ここでの両本の差は、仏種房が盗人に品物を与えようとするところが、慶本では一度であるのに対し、神本では二度にわたつてゐることである。そして仏種房という人物に対して、慶本では「哀ミ」深いとするだけであるのに対し、神本はさらに「毎事ニ无相」であつたと評して、彼が無欲な人間であつたことを強調する。そして仏種房の無欲さの強調は、その魚食がそれ自体を目的としたものでなく、別の何かを意図したことを明示する「ハカリ事」という語を、側面から保証している。この二つの部分しか持たない神本では、第一の部分で導きだされた「毎事ニ无相」という結論は、このように

第二の部分の最後の「ハカリ事」という語に働きかけており、この二点の異同は明らかに連動しているといえよう。

ここで仏種房の行為の意味を考えたい。貴志正造氏(鑑賞日本古典文学第23卷『中世説話集』77・5 角川書店)は、この仏種房の行為と『摩訶止観』卷第二下の「若し人、性として貪欲多く、穢濁熾盛にして、対治し折伏すといへども、いよいよさらに増劇せば、ただ趣向を恣にせよ。」という一節との関連を示唆された。仏種房は、執着の対象物を一旦は服する、満喫することにより、それへの執心を克服しようとしたのである。つまり、彼が一度は魚を食べたのは、それへの執着を予め断つておこうとしたものであると理解される。「是モ」とその行為を指すときに、「ハカナキ執心ニ羈テ、長ク三途ニ沈ミナン事コソ悲シケレ」と思い、門田五十丁を捨てて出奔した第6話の南筑紫上人、大事にしていた水瓶を打ち割つた教懐上人、「目出タキ」紅梅を切つた尊勝阿闍梨陽範(第7話)等の執心を断つことに成功した例を踏まえていることは疑問の余地はない(第6話については後述)。しかし、彼らは執心を断つためにその対象物を捨てたり破壊したのであり、その行為は仏種房とは方向性からいえば逆である。貴志正造氏も指摘されるごとく仏種房と全く同じ行為を行っているのは第5話の増賀上人である。

ここで第5話について少し考えてみたい。第5話では、増賀の九つのお話がある。その中で、彼は臨終の近づいたとき独りで碁を打ち、舞の真似をするという話がある。怪しんだ弟子達がその理由を尋ねると、増賀は次のように答える。

幼ナカリシ時、此二ツノ事ヲ制セラレテ思ヒナガラセズ。然ル間ダ心ニカ、リ侍リ。若生死ノ執心留ル事モヤ有ルト思ヒテト

ゾ云レケル。

彼も予め行うことにより、その執心を捨てようとしたのである。一旦は行い、かつそれによって執心を断ち切るというその方法は、仏種房のそれと等しい。

第5話の話末近くに以下のような評がある。

此人ノ振舞、世ノ末ニハ物狂トモ云ツベケレド、妄執ヲタ、ソレハ、サレバ、ヘ其ニ付、テモ有ガタキタメシニ云置ケリ、人ニ交ル習ヒ高キニ随ヒ下ルヲ哀ムニ付テモ、身ハ他人ノ物ニナリ心ハ恩愛ノ為ニツカワル。是此世ノ苦ミノミニ非ズ。則出離ノ障リナルベシ。境界ヲ離レンヨリ外ニハ、何ニトシテカ乱レ安キ心ヲ静メント云ヘリ。

傍線部「此人ノ振舞」は、第5話で語られる増賀の行為の全体を指している。その中には内論議で乞食と同じ振る舞いをしたり、多武峯に籠居したりと、「境界ヲ離レ」るための行為が多いのは事実である。しかし、臨終に際し独りで碁を打ち、舞の真似をしたことについては、執心が往生の妨げとなるのを未然に防ごうという意図のもとに行つたことが、先のように増賀自身の口から語られており、それを含めて慶本のように「境界離レントメノ思ベカリ」というにはいささか無理がある。慶本では、増賀の行為全般について「境界ヲ離レ」という意図のものであつたとするのに対し、神本では増賀の行為全体を「妄執ヲタ、ソガ為」のものと規定し、「乱レヤスキ心」（妄執に囚われやすい心）を鎮めるためには境界を離れるべきであるとする。つまり神本は、妄執を断つための一つの方法として境界離脱を位置付けている。とするならば、そこでは「此

人ノ振舞」の中に、臨終に際しての碁、舞の真似をも含み込んでいとみなすことができる。神本はこの行為を見落とすことなく増賀の「此人ノ振舞」の全体を評しているのであり、そこに慶本にはない独自の注意を感得できる。そして同様の仏種房の行為に注意する第9話における先の異同が、偶然の誤写などによって起きたものではないことも同時に確認できる。

再び第9話に戻る。神本では、仏種房の魚食が妄執を断つことを目的とした意図的な行為であることは、慶本に比してより明確に示されていた。先も述べたように慶本のみ存する第三の部分には、仏種房の臨終の様子が示される。神本にこの部分が無いことの意味を考えてみたい。

此仏種房有時風氣アリテ煩ケリ。カタノ様ナル家、アレコボレテツクロフ事ナシ。病ヲ見ル人モナケレバ、ヒトリノミ病臥セリケルニ、時ハ八月十五夜ノ月イミジクアカ、リケル夜、ヨヒヨリ音ヲアゲテ念仏スル事アリ。マヂカキ家々タフトクナム聞き。集リテ見ニ、板間モアハズアレタル家ニ、月ノ光心ノマ、ニ指入タルヨリ外ニトモナシ。夜中ウチスグル程ニ、アナウレンシ、是コソハ年来思ツル事ヨト云音、カベノ外ニ聞ヘケリ。其後ハ念仏ノ音モセズナリス。夜アゲテ見レバ、西ニ向ヒテ端座シ合掌シテ眠ルガ如クニテゾ有ケル。此家ハスコシモ離レズアヤシノ下臈ノ家ドモノ軒ツバキニナム在ケル。

ここでは仏種房が、傍線部2のように「アヤシノ下臈ノ家ドモノ軒ツバキ」にある粗末な家でその最期を迎えた様子が示される。傍線部1のように、彼は念仏を唱えて往生を遂げる。仏種房が往生を遂げた人物であることは、冒頭近くに「近キ世ノ人ナレバ、終ニ往

生人トテ人皆貴ミ合ヒタリシヲ、バ伝エ聞キ侍リキ。」と既に示されており、彼の往生の事実を示すだけならばこの部分には必要ない。また、彼の往生はそれまでの部分から導きだされた未然に妄執を断つたという要因に加えて、この部分があることによりさらに臨終における念仏という要因によって可能であったことになる。先に確認したような仏種房の妄執を断つという行為への神本の敵密な意味付けの態度、それに注目している態度からすれば、妄執を断つたこと以外の往生に結び付く要因は無いほうがむしろ整合性を持っていると思われる。もちろんこの部分を神本が削除したのか、あるいははもととはなかったのか、後に慶本にのみ増補されたのかは不明であるし、ここでは問題ではない。神本がこの部分を持たないことと、第9話における執心を断つことへの語のレベルでの注意が連関していることに注目したい。それによって両本の差は、この第9話が単にある一つの挿話を持つか持たないかという、言わば量の違いに止まらず、説話の方向性にも及んでいるのである。

三

次に、このような異同が、説話相互の関係性にどのような影響を与えているかを考えてみたい。まず、前説でみた異同からみておく。第5話の増賀、第9話の仏種房の執心を断つ行為に對しての共通性が、先のように明確に意識されていた。とするならば、第9話の仏種房の行為を「是モ」という場合、単に妄執を断つということでは第6・7話を踏まえている。しかし、増賀の臨終に際しての先の行為を見落とさない神本では、より直接に第5話の増賀の行為を前提とした語ともなっている。これらの語句によって、慶本の配列

として指摘されている妄執を断つという説話の共通性は、神本においては第5話にも及ぶことが明示されるのである。

しかし、同時に慶本では有していた説話の関係性が、なくなっていることも無視すべきではない。慶本のみ仏種房の臨終の部分では、傍線部2のように「アヤシノ下臈ノ家ドモノ軒ツギ」という市井に彼が住んでいたことが述べられていた。この直後の第10話には「瑠璃聖」・「仏性聖」と呼ばれる市井の聖が登場する。第9話の仏種房も先の部分を有するならば、市中に生活していたという点ではこれらの聖と共通し、それが第10話との連想の契機となっている。しかし神本ではその連想契機は失われており、否定的な意味でも慶本とは別の関係となつているといえよう。

ここで、巻一の十一話の説話の関係性を大まかに見ておきたい。この部分について、慶本の巻一の説話配列としてはこれまで多くの論考がなされている。⁽¹⁰⁾ その大部分に共通するのは、第1～5話を、出家、発心譚あるいは高僧の再出家譚、第6話以降物欲・執心の説話(第6～8話)、無名の聖の説話(第9～11話)として、第6話を「主題の転換」する説話ととらえることである。第6話は説話の内容としては発心・出家譚ではあるが、その説話評語では財をむさぼるべからずとして、その間にズレがあることを指摘し、そこに転換の契機をみ、第5話の先の増賀の臨終の話は、執心を断つという第7話以降の「主題」の伏線となつていとされる。

まず第6話について確認しておきたい。第6話の南筑紫上人は、俗人のときは筑紫に住んでいたが、あるとき俄に発心して娘の制止をも聞かずに土地を捨てて高野山に登る。その意味では確かに発心、出家譚といえよう。その発心の場面をもう一度見ておきたい。

彼は、我が家の前にある門田を「門田五十丁持タル人ハ堅クコソアラメ。ゲシウアラヌ身哉。」と眺めている時に、以下のように思い返して出奔する。

抑是ハ何事ゾ。此世ノアリ様、昨日有ト見シ人ハ今日ハ无シ。
朝ニ榮ヘタル家ハ夕ベニハ滅シヌ。一度ビ眼ヲ閉テ後、惜ミ資
ヘタル物、何ノ詮カ有。ハカナキ執心ニ羈テ、長ク三途ニ沈
ミナン事コソ、悲シケレ。

傍線部のように彼が気づいた自らの「執心」とは、直接的にはその眼前にある自分の支配する「門田」に対するものである。そして評語でも、

惜シムベキ宝ヘ資財ニ付テ、ツヨク厭フベキ心ヲ起シケン。
最ト有難悟ナリ。

とあり、「ツヨク厭フベキ心」を起こしたのは、その対象物を目の前にしてのこうと示されている。説話の中でも本人の語として「執心」とあり、彼は「門田五十丁」への執心を断とうとしたのである。その意味では説話の内容と評の間に特に齟齬はない。「惜ミ資ヘタル物」、「惜シムベキ宝ヘ資財」とは、それを一般化した表現と取るべきだろう。とすると、第7話の教懐上人・阿闍梨陽範、ちやうどその対照的説話として執を断つことに失敗した第8話の佐国・仏性房へ幸仙、及び先の第9話等に含めて第6話も執心を断つことに関する説8話とも考えてよい。

先ほど述べたように、第5話中にも執心を断つという増賀の話があり、さらにそれは神本独自の語がより明確に把握していた。それにより、説話の内容において第5話には以降続く執心を断つ説話(第6〜第9話)との関係性を、慶本と比較してより明確な形で持

っている。神本ではそれを語のレベルで明示しており、単なる伏線というよりもより直接的な関係を持っているとしてよい。

広田氏(前掲論文)は慶本の巻一の説話の配列の問題として、「かくのごとく巻一を通観してみると五話は一見僧賀聖の逸話の収録の相をよそおひながら、前出の発心・出家譚を継承し、なおかつ巻一全体の主要主題をすべて網羅して必要十分な話柄をもって緊密に構成された一話であるということを知る。」とされる。それは、言い換えると第5話はその説話の内容においてそれ以前の一群の説話(第1〜4話)と、それ以降の一群の説話(第6〜10話)の両方の特徴を兼ね備えているということであろう。そして神本独自の語句はそれをよりはっきりと示しているのである。

さらに第1〜11話の全体を通して別の方向からみると、既に慶本のこの部分の説話配列の問題として指摘されているように、

今昔シモ誠ニ心ヲ起セル人ハ故郷ヲ離テ不見^{イダシ}知^チ処ニテ、
深^{イダシ}名利ヲバ捨終ルナリ。菩薩ノ无正忍ヲ得タルスラ、本見
タル人ノ前ニハ、神通ヲ現ズル事難シト云ヘリ。況ヤ今起セル
心ハヤゴト无ケレド、イマダ不退ノ位ニ到ラネバ、事ニ触レテ
乱ダレ安シ。故郷ニ住ミ、知ル人ニ交リテハ争カ一念ノ妄念起
ラザラン。

と第3話で、山林に隠遁することを賛美しつつ、それが第10話で

大隠ハ朝市ニ有ト云ヘルハ則是也。カク云フ心ハ、賢キ人ノ世
を背ク習ヒ、我身ハ市ノ中ニ有レモ、其徳ヲヨク隠クシテ人ニ
知ラレヌ也。山林ニ交リ跡ヲ聞クスルハ、人ノ中ニ有テ徳ヲ得
隠サヌ人ノ振舞ナルベシ。

と、それを否定してさらに上位のものを現出せしめる。つまり一面では内容がより仏教的深化する方向に説話が配列されているのである。それは慶本第一二話（神本第60話）をこの部分に持たない神本においてもほぼ同じことがいえる。

四

次にこの部分の説話の人物について考えてみたい。第1〜11話の人物を列挙する。

※玄奘僧都（第1・2話）、平燈供奉（第3話）、千観内供（第4話）——高僧

※増賀上人（第5話）

※南筑紫上人（第6話）、教懐上人・阿闍梨陽範（第7話）、佐国・仏性房（第8話）、仏種房（第9話）、瑠璃上人・仏性聖（第10話）、高野ノ麓ノ上人（第11話）——上（聖）人・聖

まず、この部分にあるそれぞれの説話の中心的な人物が、第8話の佐国を例外として他は全て僧という共通点がある。それは、慶本においても変わらないが、神本では第12話以降の人物が、常盤橋（橋）大夫守輔（第12話）、前瀧口助重（第13話）、讃州源大夫（第14話）、増ノ叟（第15話）、伊予僧都ノ大童子（第16話）と世俗の男の説話が並んでいることから考えて、注意すべきことである。

また、既に指摘されていることだが、第1話から、僧都、供奉、内供、と高僧が前半部に続いているのに対し、後半部は上（聖）人、聖を中心としたより下層の僧になっている。それを本文の上から見てみたい。第5話までの説話の冒頭の人物の紹介の部分を挙げてみる。

第1話 昔シ玄奘僧都ト云人有ケリ。山科寺ノヤゴト无智者也ケレト……

第3話 中比山ニ平燈供奉ト云テヤゴト无キ人有ケリ。則天台真言ノ祖師也。

第4話 千観内供ト云ハ智證大師ノ流ノヤゴト无キ（並ナキ）智者也。

第5話 此人若クテ碩徳人ニ勝レタリケレバ、行末ヤゴトナキ人ナランナンド普ク普合ケレバ、心ノ中ニハ深ク世ヲ厭ヒテ、名利ニ羈ズ只極楽ニ生レントノミゾ願レケル。

（第2話は第1話と同一人物）

と、神本では第1〜4話では、一致して「ヤゴトナキ（智者）」という捉らえ方をしている。慶本では第4話の該当部分が「並ナキ智者」となっている。神本では「ヤゴトナキ智者」とするこの部分は、『私聚百因縁集』でも「無ニ止事ニ智者」とあり、「ヤゴトナキ」は神本によって作り出されたものではないが、少なくとも神本がその語を選び取っていることに意味がある。第5話の僧賀も先程の冒頭部に「行末ヤゴトナキ人ナランナンド普ク普合ケレバ」と、将来はそのような人物になると、周囲に思われていたことが示されている。つまり、第1話〜第4話は「ヤゴトナキ人」、第5話はそれに準ずる人物の説話とみることができる。そして「ヤゴトナキ」という共通の語で人物が規定されることによって、神本では前半の高僧の説話が主ぶことは、慶本より明確に示される。ところが第5話の僧賀は、話中では別に「此聖（聖人）・聖り」とも呼ばれる。そして第6〜第11話の説話の中心人物は九人中、執心を断つ説話の陽範阿闍梨（第7話）、佐国（第8話）を除く七人までが、「上（聖）

人」あるいは「聖」と呼ばれる人物である。⁽¹¹⁾つまり、第5話以降は聖、上人を中心とする説話となっているのである。とするとこの部分は、第5話を境として「ヤゴトナキ人」高僧と上人の説話に分かれる。そしてその前後の説話の人物の両本の特徴を、第5話の増頁は合わせ持っている。

このようにその説話の内容からもまた中心となる人物の面からも、第5話は前後の説話の両方の特質を重ね持っているのである。

とするならば、もしここに二つの説話群(第1～5話、第5～11話)を想定するならば、第5話においてその説話群の転換がなされているといえるだろう。そして、その転換を慶本に比してより明確に示しているのが、神本独自の語句であった。第5話が広田氏が指摘されるように巻一全体を網羅した内容を持っていることは、以上述べたごとくの非常に重要な役割を持つものとしてこの位置に配されたことに原因するのではないだろうか。氏の指摘された内容の問題とさらに人物の二面から、この説話を契機としてその説話群の転換が行われたとするならば、それを両面にわたり如実に示す神本独自の語もまた無視できない意味をもっているといえるだろう。そして、この部分の神本の異同にかくのごとくの説話の関係性への寄与を認めることができるならば、両本の新旧の問題を考察する前に、神本全体の異同および語句の意味を再検討する作業が求められるのではないだろうか。ともあれ、この部分の神本独自の語句が、一つの説話の方向性、および説話相互の関係性を指摘される慶本のそれとは、微妙に変えていることを確認しておきたい。

五

以上第1～11話の説話相互の関係をみてきた。ここでは、この部分の説話の関係性と近似する例を、神本の他の部分に拾ってみた。

先に僧の説話が第1～11話に集められていたとしたが、第8話の佐国は僧ではない。さらに第8話における佐国・阿闍梨陽範は、その前後に「上人」、「聖」が集中する部分にあるとしたが、その意味でも前述のような人物の整理には反している。ただ、この第8話は執心を断つことを失敗した例として、第7話のそれに成功した例の対照としてこの位置にある。多くの説話集において対照的説話を前後に連続させるのは、連想によるごく一般的な配列だが、ここでも同様な理由により第8話は配置されているのである。その意味では説話の内容が、人物の要素よりも優先されたゆえの位置であると考える。神本では、これ以外にも母親が子供の死を「老少不定ノ世」と思い切った第26話と、逆にいつまでも悲しんだ第27話、入水往生を遂げた第27話とそれに失敗した第28話、自分の心の程を弁えずに往生に失敗した第28話と、それを弁えて往生を遂げた第29話、前世の縁により今世に加護を受けている第40話と今世の結縁により来世を願う第41話等、独自に対照的説話が連続している箇所が散見される。また慶本と共通して連続している例は、無智なる樵夫の独覺する第43話と貪欲な智者の第44話、さらにその老人の貪欲さに対して幼児の往生する第45話、また慶本とは逆順ながら善知識の補助によって往生に成功する第55話と同じく善知識がいながら失敗する第56話等がある。

第1～11話で第5話は前後の一連の説話の両方の特徴を合わせ持つことにより、その転換を果たしていた。その類例として、女の念仏する話として女の説話群から念仏の説話群へと転換させる第24話、同朋の母を葬り法華八講を始めた話として、明神の特に死穢に関する説話群から法華経関係の説話へと転換させる第39話（法華経関係の説話の前に対照の説話として第40話が間に入る）等々がある。

また僧の説話の集まる第1～11話全体と対応すると思われる箇所がある。先に世俗の男と説話がが続いているとした第12～19話である。その部分の中心的人物を列挙すると次のようになる。

※常盤橋（橋）大夫守輔（第12話）、前瀧口助重（第13話）、讚州源大夫（第14話）、江州増ノ叟（第15話）、伊予僧都ノ大童子（第16話）——世俗の男

※伊予ノ入道（第17話）、参河之入道（第18話）、内記入道（第19話）——入道

それ以降は女に関する説話が続き、ここでは除外しておく。さてこのように男の説話が並ぶのは、ちょうど第11話までに僧の説話（第8話の佐国は例外）が並んでいたのと対照である。これらの説話は、慶本においては第二二話、第二一説、第二九話、第二六話、第二七話、第二八話、第一六話、第一五話に相当し、部分的には連続しているが、一続きのものではない。この第12～19話までの人物を細かくみると、最後の三話の人物が入道であり、世俗のままの男の説話と入道となった者の説話に分けることができる。これは、僧の説話群が高僧、上人に細分できると近似する。一旦は出家した入道を「男」の中に含みこむのは、いささか奇異な感じもな

いではないが、『大日本法華経験記』では、「入道乗蓮」は巻下第95という世俗の男の部に置かれていたし、「入道念覚」は『三外往生記』（第45話）では同じく世俗の男の部に位置しており、珍しいことではない。

またその内容をみると、大きくみれば、「仏法ト云事ヲ不知」、「都ベテ愚痴極レル人」（第12話）から、「当初世ニ仕、ニケル時ヨリ心ニ仏道ヲ望ミテ事ニ触テ憐ミ深クナン有ケル」という人物へと説話が並んでいる。細かくみれば、死の直前の短期間、極端にはただ一念の念仏により往生を遂げるもの（第12・13話）から、長年念仏等の功を積み往生を遂げるもの（第15・16話）へ、入道の説話では中途において新たに発心するもの（第17・18話）から、その冒頭からすでに発心しているもの（第19話）へと順序で説話が並んでいる。つまりより仏教的深化を見せる配列となっているのである。それは山林に隠遁する者から「朝市」にある大隠へと並んでいた第1～11話の僧の説話の配列とレベルの違いこそあれ符合する。とすると、第1～11話の僧の説話の並ぶ部分と、この男の説話の並ぶ部分は、それぞれで人物の要素において二分することができ、また大きくみると説話の並び方も類同のものであって、この二つの部分の対応関係は第5話のように前後の説話の要素を合わせ持つ説話こそないが、はっきりと認められるのである。そして僧、男という仏教的階層の対照が特に重要であると考ええる。

このように、これまで「穩当」ではない、未整理、あるいは錯簡等の偶然のもたらしたものとされた神本の説話配列の中に一部分ではあるが、慶本の配列と共通する部分と近似した、あるいはそれを一部とする大きな秩序らしきものが垣間見えるのである。

男の説話群(第12〜第19話)は、永積氏の指摘する「彼」の問題を含んでいる。先程確認したように、僧の説話、男の説話の集まりの中で、それぞれに仏教的深化をする順序に説話が並べられていた。そして「彼」の問題で指摘される第18話、第19話の人物を比較すると、参河入道(第18話)は、女ゆえに発心したことが記されるのに対して、内記入道(第19話)はその登場の時には既に発心したものと記されている。男の説話群の中で先のような形に説話が並ぶと仮定すると、後に在るべきはやはり説話の冒頭からすでに発心したものと登場する第19話の内記入道の方であろう。確かに前述の「彼」の問題から見ると、この神本の配列は穩当とはいえないが、神本の説話の並び方からすると、まさにこうあるべきである。またただの一念で往生する守輔の第13話も、功を積んでいない世俗の男の説話としては、確かにこの位置にあるべきなのである。

山口真琴氏は、「彼」が周知の事柄などを指し、「例の」という意味での使用を「カノ山陰中納言」、「彼妙莊嚴王ノタグヒ」の例をあげて示されている。慶本第一〇〇話の「カノ恒舜僧都」の前提となるべき説話が、神本のみに存在する問題についての言及であるが、この「彼」の問題でも、同様に考えることはできるであろうか。神本にはその外「彼宿命智」(序)、「彼極樂浄土ノ莊」と(第15話)等の例があり、必ずしも既出の事柄である必要はない。そしてそれは、その事柄ないし人物が「どれ程流布し、著名であったかに関わってくる」判断に帰する。問題の「彼」と付された鳥羽僧正、慶滋保胤は、確かに著名な人物ではある。さらに鳥羽僧正は『発心集』のなかでは釈尊(仏)、法華経、神明以外で常に「給フ」という尊敬語を使われる空也(第4話)、善尋(第25話)、道紳(第25話)、

仙命(第29話)、玄賓(第54話)という人物の中の一人である(第59話)。「発心集」の中でも特別な人物とはいえるだろう。そのような人物に対して「例の」という意味において「彼」を付したのだろうか。しかし、そのように考えても「彼」と付した人物がすぐ後の説話に登場すること(説18・19話)などから、永積氏以来指摘のごとく「彼」の問題に関しては、神本より慶本の配列の方がやはり「穩当」と判断すべきだろう。ただ、原態へと遡及することを除外するならば、先に述べたように慶本と共通の説話の並び方を示す部分の神本独自の語句の有り方と、その部分に対応する配列を示す箇所のあることから考えて、この点のみから神本全体の説話配列を否定するには、いささかのためらいを禁じ得ない。

六

以上、神本の異同の意味の一端を慶本と同一の説話の並び方を示す巻一(第1〜11話)を中心に考えてきた。そこには、一話の中で量的な変化だけではなく説話の方向性をも変化させる異同が含まれていた。さらに神本独自の語は、説話相互の関係を慶本に指摘されるものとは微妙な形で変えてしまっていた。そしてそこに形成されているものと類似する説話の関係を有する箇所、およびその全体に対応すると思われる箇所が神本独自の説話の並び方を示す部分にみることができた。

以上のように両本の異同は、当否の面からだけではみえない神本全体の構成に及ぶ大きな問題を孕んでいる。神本の全体像を考える上で、さらには慶本との質的差異を考える上で見過ごすことのできない問題であると考える。神本の説話の配列と人物の要素の關係に

ついでに稿を改めたいが、『発心集』という説話集を慶本の側から考える(あるいはその明白な誤謬を改めるときに限って神本を使用する)というだけでなく、一つの有力な享受の様態として再度検討すべきではないだろうか。すべてを新旧の問題、書承の問題に吸収させるのではなく、現今の神本の語句をその総体の中で見直すという態度も必要であると考へる。

注

- 1 『異本「発心集」について』岩波文学講座「日本文学」付録「文学」第二十号 33・4 後に『中世文学論』(44・11 日本評論社)所収
- 2 『長明発心集考』国語と国文学 33・6、8 後に『中世文学論』所収
- 3 以下、両本の説話番号は築瀬一雄氏『校註鴨長明全集』(80・8 風間書房)に依る。
- 4 築瀬一雄氏(『発心集の編成について』中世散文学研究学会報五 66・6 『発心集研究』所載)も別に「彼」について考察し、同時に慶本の巻三の説話配列を考察し、そこに「発心集編集者の心理の推移を窺うことが出来る」とし、それと神本との「不一致の箇所には穏当と考え難い点が見出される」とした。
- 5 「ひじりと説話文学―『発心集』の世界―」(『日本の説話3 中世』73・11 東京美術)、鑑賞日本古典文学第二十三巻『中世説話集』『発心集総説』(77・5 角川書店)、『発心集』から『方丈記』へ(『国語と国文学』78・3)。また貞志氏の他に、神本先行説をとる橋本孝氏(『長明発心集私見』上・下 国語と国文学 35・11)、岩田諦静氏(『発心集の形成と法華経関連の説話』大崎学報 84・2)も神本の現在の配列を難駁・未整理とする。
- 6 『発心集の説話配列』女子大文学国文二十七号 76・3、「発心集本文をめぐる諸問題」説話文学研究第十四号 79・6、後に『中世仏教説話の研究』(87・5 勉誠社)所収
- 7 三木紀人氏『新潮古典集成』『方丈記 発心集』頭注(76・10 新潮社)を参照した。
- 8 引用本文は、神本は神宮古典籍影印叢刊『西公談抄 発心集 和歌色

葉集抄書』(84・5 八木書店)に依り、慶本は慶応義塾図書館蔵本を用いた。また句読点・清濁は私に付し、明らかな誤写と思われる点は私に改めたところがある。

9 関口真大氏校注岩波文庫『摩訶止観』(66・7 岩波書店)の訳文に依る。

- 10 慶本の巻一の説話配列については広田氏前掲論文の他に、志村有弘氏『中世説話集研究序説』(74・11 桜楓社)、木藤才藏氏「鴨長明における生と死―発心集と方丈記―」(日本文学 75・10)、原田行造氏「発心集」の行造と成立過程試論―序・跋と八巻の形態をめぐって(『説話物語論集』76・2)、岡本敬造氏「発心集」の通世譚にみられる撰集意識についての一考察―とくに巻一を中心としてみた場合―(宇部国文研究第八号 77・3)、前田淑子氏「発心集と摩訶止観 序・巻一と能安忍の観法」(言文 78・10)、海老原雅人氏「発心集」の巻構成についての覚え書き―流布本巻一から六を通して―(早稲田実業学校研究紀要 79・12)、山本一氏「発心集」巻一・二の主題展開(国文学論叢 82・3)、標ゼミ「発心集」の編纂意識について―巻一・巻二・巻三の特徴について―(『緑聖文芸』83・3)、花山聡氏「発心集」構造論試―内傾視の体現として―(仏教文学 85・3)等に詳しい。
- 11 山口真琴氏「異本発心集神明説話をめぐる諸問題」(国文学攷 78・12)